

漢代における龍の属性の多様化について

著者	周 正律
雑誌名	東アジア文化交渉研究 = Journal of East Asian cultural interaction studies
巻	8
ページ	451-475
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	The tendency to diversify of attributes of Long (龍) in the Han dynasty (漢代)
URL	http://hdl.handle.net/10112/9176

漢代における龍の属性の多様化について

周 正 律

The tendency to diversify of attributes of Long (龍) in the Han dynasty (漢代)

Zhou Zhenglv

This paper discusses a tendency to diversify of abstractions of Long (龍) in the Han dynasty (漢代). Before that time, Long was considered to be a symbol of one village like a totem. By the unification of ancient China in Qin (秦) and Han dynasty, Long was elevated to be a god with sacred power and started to be diversified in its attributes according to the books of that time. It was believed to have a ability of making rain or control water, and because of that power, a soil image of Long (土龍) was used as a sacrifice to pray for rain when it was in a drought. And Long was also believed to have a function as to be a transportation between the human world and the immortal world. And it turned out that, in Han dynasty, all those abstractions of Long could once be seen in a representative sample called Qing Long (青龍), which is a constellation in ancient astronomy of China.

Almost all of the attributes of Long have been passed to until now, but some of them also had been changed their appearances when new trends of thoughts such as buddy coming to be known in the land of ancient China.

キーワード：龍 漢代 属性 青龍 天文学

はじめに

龍は中国の上古時代では、唯一の部落象徴ではなかったが、多くの部落象徴の中から選ばれ、文献史料にも多く見られるように、王権に神秘性を加え、また、賢者の偉大さを表すなどのために利用されていた。漢代になると、龍は「天人感応」説によって、明君徳政を表す瑞祥になり、また後に、その祖先・起源(圖騰:トーテム)という性格がうまく利用され、「感生」、「化身」などの伝説の形をとり、皇帝と結ばれ始めた。

世界的に見れば、蛇信仰は珍しくはない。いわゆる大地母神への信仰は、農耕牧畜文明なら、普遍的なものだと思われる。しかし、西洋とはまったく違う文化土壌から生み出された中国の龍は他の蛇信仰と比べてみれば、異質なものだと思われる。

『爾雅翼』の龍の条は、

龍、春分而登天、秋分而潛淵。物之至靈者也。淮南子言、萬物羽毛鱗介皆祖於龍。(中略)王符稱、世俗畫龍之狀馬首蛇尾、又有三停九似之說、謂自首至膊、膊至腰、腰至尾皆相停也。九似者、角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蟹、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛。頭上有物如博山、名尺木、龍無尺木不能升天。(中略)古者有鬃龍御龍氏徒、以知其欲惡而節制之耳。將雨則吟、其聲如受銅盤、涎能發衆香、其噓氣成雲、反因雲以蔽其身、故不可見。今江湖間時有見其一爪與尾者、唯頭不可得見。自夏四月之後龍乃分方、各有區域、故兩畝之間而雨暘異焉。又多暴雨說者、雲細潤者、天雨猛暴者龍雨也。龍火與人火相反、得濕而焰、遇水而燔、以火逐之則燔熄而焰滅。(中略)故在人比君、在卦比乾之七爻、象天蒼龍七宿、乾七爻以龍為用天、七宿以龍為體、蓋自下數之其第一爻潛龍則未見也。(中略)今易讀亢龍與角亢之字異音、然其義實相通、蓋順則降、升則逆、龍之亢有逆鱗一尺、而不可磨也、則為能升而不及反、故曰亢龍有悔、然則乾之亢龍雖以角亢之亢讀之可也¹⁾。

と龍について述べる。『爾雅翼』は宋の時代の書物であるが、漢代の王符の言葉と『淮南子』の中の言葉が引用されている。それによると、龍は羽と鱗がある万物の始祖で、世俗が描く龍は馬の頭と蛇の尻尾をしている。他に、龍の形には「九似」という特徴があり、体の各部分は九つの他の動物に似ている。また、龍と、『易経』「乾卦」と古代天文学の関係も提示した。確かに龍のくねくねしている体が蛇を連想させるが、しかし、他の部分はとても蛇信仰では一概しがたく、中国の独自の文化要素として取り上げることがよいと考えられる。

今日、龍と聞いたら、少なくとも東アジアにおいて、人々はすぐその雲に乗るくねくねする姿を頭の中に思い浮かべるのであろう。また、龍の画像を見ると、それが龍だと、われわれは思う。さらに、河川や海などを見て、その中に龍が棲むと想像し、滝や竜巻などを見たときも、龍のイメージを思い浮かぶこともよくある。「天子・皇帝」と「龍」を一緒に持ち出すこともごく普通のイメージである。一方、西洋の諸外国では、中国・中国人のことを龍に喩え、「東方の巨龍」などの言葉もよく用いられる。そのようなことを語る時に、彼らの頭に浮かぶのはドラゴンか龍かは別として、中国人が龍を自分たちの象徴としていることを、西洋人が意識しているのは事実である。このような龍文化は長い間われわれと共存し、東アジアないし世界中に展開してきた。

しかし、漢代における龍のイメージは、われわれが認識している龍の属性が基本的に出揃ってはいるが、現代における龍のイメージのように系統的に整理されているものではなかったと思われる。本稿では論じないが、図像的には、秦漢の統一による文化融合と技術と絵画技法の進歩によって、龍の図像は具体化し、収斂されていく傾向が見られる。一方、龍の様々な属性については、いまだ前代の伝説を受容しながら、「龍」という器に人々が要素を注いでいた段階だと考えられる。そのような時代における龍の属性には、さらに多様になる傾向が見られる。本稿では、文献史料に見られる龍の属性を分析し、漢代及びその以降における龍の属性の多様化する傾向を明らかにしていきたい。

1) 『爾雅翼』卷二十八「釋魚一」龍

一、『山海經』における龍

『山海經』が示した多神的な世界観は、漢代の龍に一定の影響を与えたと考えられる。前述の龍と王権の関係もそうであるが、その認識の由来の一つは『山海經』における帝と龍の関係だと思われる²⁾。『山海經』に記されている獣や伝説や神々の姿などは、先秦時代のものだと思われ、その内容は後世まで伝承されている。画像石によく見られる漢代で流行していた「西王母」や、「伏羲」や、「女媧」などの神、或いは「九尾狐」や、「開明獸」や、「避邪」などの怪物も、基本的に『山海經』にその記述が見つかる。龍と蛇についての記述も数少なくない。その中には、

南方祝融、獸身人面、乘兩龍³⁾。

西方蓐收、左耳有蛇、乘兩龍⁴⁾。

東方句芒、鳥身人面、乘兩龍⁵⁾。

北方禺彊、人面鳥身、珥兩青蛇、踐兩青蛇⁶⁾。

とあるように、龍と蛇が区別され、四方の神々の乗り物とされている記述がある。このような「乗龍」の記述のほか、

凡雒山之首、自招搖之山、以至箕尾之山、凡十山、二千九百五十里。其神狀皆鳥身而龍首。其祠之禮、毛用一璋玉瘞、糝用稌米、一璧、稻米、白菅為席⁷⁾。

或いは、

又西北四百二十里、曰鍾山、其子曰鼓、其狀如人面而龍身、是與欽鴟殺葆江于崑崙之陽、帝乃戮之鍾山之東曰嵒崖、欽鴟化為大鸚、其狀如鸚而黑文白首、赤喙而虎爪、其音如晨鵠、見則有大兵。鼓亦化為駿鳥、其狀如鴟、赤足而直喙、黃文而白首、其音如鵠、見即其邑大旱⁸⁾。

という、「鳥身而龍首」と「人面而龍身」など、体の一部が龍の特徴を持つ神々と動物も記されている。また、他に龍、或いはその類に関して、

2) 林巳奈夫、『龍の話 図像から解く謎』中公新書、1993年

3) 『山海經』「海外西經」

4) 『山海經』「海外西經」

5) 『山海經』「海外南經」

6) 『山海經』「海外東經」

7) 『山海經』「南山經」

8) 『山海經』「西山經」

龍魚陵居在其北，狀如狸。一曰鰕。即有神聖乘此以行九野。一曰鰕魚在天野北，其為魚也如鯉⁹⁾。

と、「龍魚」という「狸」の姿をした動物が山に住んでいるという記述がある。その動物は「鰕」ともよばれ、「神聖」はこれに乗って「九野」を行き来している。もう一種は「鰕魚」といい、それは鯉に似た魚のようである。

そこに記されている動物が「龍魚」と名付けられたのは、恐らくはその動物の特徴を形容していると思われる。「狸」の姿といえば、四足で地面に這う、かつ尻尾があるということが思い浮かべられるだろう。『山海經』の中には、「狸」で四足の動物であることを表現する例が他にもある。いずれにせよ、「龍魚」は、龍の名を持つことと、「神聖」の乗り物である点から、龍の特徴の一部を持っているということ、『山海經』が提示していると見てよからう。

こうしてみると、龍に関する『山海經』の記述は、大きく二通りがあるが、龍そのものに関することは述べてない。それは恐らく、龍はもともと想像上の生物であり、秦漢以前の龍についての表現は抽象的だということにあると考えられる¹⁰⁾。しかし、『山海經』の龍に関する記述による龍の一部の特徴と、龍が神や帝の乗り物であることから、漢代の龍に影響を与えた先秦時期の龍の認識がうかがえるのであろう。

たとえば、前文で引用した「龍魚」は、その尻尾と四足がある外見が龍に似ていること、またその「神聖」の乗り物になれる点と、「龍」と名付けられたことからわかるように、龍が当時では普遍的に認識されている。そのことは、『山海經』の世界観が取り込まれている前漢の画像石からもうかがうことができる。

しかしその一方、漢代の龍と『山海經』に現れた龍のイメージとは、明らかに違うところもある。

龍、鱗蟲之長。能幽、能明、能細、能巨、能短、能長。春分而登天、秋分而潛淵。从肉飛之形、童省聲。凡龍之屬皆从龍¹¹⁾。

とあるように、鱗がある類の長であり、変化多様で、また季節によってすみかを天と淵に移動するという属性が増やさせた、より具体的で包括的な龍のイメージがみられる。

こうしてみれば、『山海經』における龍のイメージは、抽象であっても、基本的に安定した形があったものだと推測できる。漢代における龍のイメージはそのようなイメージを受け入れたうえ、『山海經』と異なる文化系統における龍の属性も継承したと考えられる。それは、漢代における龍の属性が『山海經』のイメージを越え、多様化する傾向を有しているからである。したがって、次章では、漢代における龍の全般的な属性についての分析により、龍の変容と昇格について検討してみたい。

9) 『山海經』「海外西山經」

10) 徐華鏞、『中國的龍』、「第三章 龍の歴代演變和藝術特色」、輕工業出版社、1988年、7-31頁

11) 『説文解字』「龍」の条

二、漢代における龍の変容と昇格

古代の学問者たちは、特定の抽象的な物事を具体的に説明するためには、よく龍をメタファーとして用い、龍のある性格を借りて、相手に自分の見解を理解してもらうというようなことをしていた。したがって、龍の属性の全貌を取り上げるためには、それらの文章の中に点在している龍のイメージを総合して検討しなければならない。

1. 「大徳」と自然調和のイメージである龍

そのような文章の先例でもあるが、『易経』「乾卦」には、

乾。元。亨。利。貞。

初九。潜龍。勿用。

九二。見龍在田。利見大人。（中略）

九五。飛龍在天。利見大人。

上九。亢龍有悔。（後略）¹²⁾

というような龍を用いる説明文がある。こうした占いの解釈として、後世の人々は文中の龍について、自分の見解を提示した。

たとえば、「十翼」の中には、

初九曰「潜龍勿用」、何謂也。子曰「龍、徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而无悶。樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潜龍也。」

九二曰「見龍在田、利見大人」、何謂也。子曰「龍、徳而正中者也。庸言之信、庸行之謹、閑邪存其誠、善世而不伐、徳博而化。『易』曰「見龍在田、利見大人」、君徳也。」

九五曰「飛龍在天、利見大人」、何謂也。子曰「同聲相應、同氣相求。水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩。本乎天者親上、本乎地者親下、則各從其類也。」

上九曰「亢龍有悔」、何謂也。子曰「貴而无位、高而无民、賢人在下位而无輔、是以動而有悔也。」¹³⁾

と『易』の原文の解釈をし、「乾」の初九の条に引用された龍は「徳而隠者」、つまり隠居している聖人の化身とされ、九二の条にも「徳而正中者」とされ、大いなる「徳」あるいは力の持ち主であるが、個

12) 『周易注疏』

13) 『周易注疏』

人の名利を目指さず、太平の世では身を隠している、というような中庸的な性格を持つ存在として表現されている。また、九五の解釈には、「雲従龍」、つまり、龍の行動には雲が伴うと言い、龍の行動は天候へも影響力があるということで、聖人の言動が世の中に影響をあたえることを述べている。そして、上九の条には、天に昇り、最高点に達した「亢龍」が描かれ、「十翼」は、それが高位に座せられて孤立された人だと解釈されている。

こうした龍のイメージは『莊子』の中にも見られる。

孔子見老聃歸、三日不談。弟子問曰「夫子見老聃、亦將何規哉？」孔子曰「吾乃今於是乎見龍。龍合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽。予口張而不能嚼、予又何規老聃哉。」子貢曰「然則人固有尸居而龍見、雷聲而淵默、發動如天地者乎？賜亦可得而觀乎？」遂以孔子聲見老聃¹⁴⁾。

とあるように、孔子の言葉を介して、老子を龍に譬え、彼には「養乎陰陽」的な思想・大いなる徳があると述べている。そこに提示された龍は、「合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽」という、つまり、自在に姿を変えることができ、雲に乗って天地を自由に飛び駆ける。また、「雷聲而淵默、發動如天地者」、淵の底から現れず、人々に姿を示さなくとも、その雷のような咆え声が天地をも轟かす。また、「養乎陰陽」からうかがえるように、龍は世界のすべての理を理解できる自由自在な聖人の化身とされている。つまり、龍の行動は「陰陽」という世界の根源の理に一致しているとされている。そのような龍のイメージについて、前漢の礼学者の戴徳（生没年不詳）は、

龍非風不挙、龜非火不兆、此皆陰陽之際也¹⁵⁾。

と記し、つまり、龍は風の力によって天に昇り、これは万物の行動がすべて陰陽、すなわち世の理にあわなければならない証拠だと述べている。

2. 雨乞いに用いられた龍

また、前述のような龍と自然の関係の延長として、

物故以類相召也、故以龍致雨、以扇逐暑……¹⁶⁾

というように、雨乞いの儀式には、龍が天と通じる媒介として用いられた。龍と水の関係については、前文に引用した『説文解字』の「龍」の条からもうかがえるように、漢代の伝説で、龍はすでに淵に棲息しているとされている。漢代では、

14) 『莊子』「外篇」天運

15) 『大戴礼記』卷第五

16) 『春秋繁露』卷十三「同類相動第五十七」

毛羽者、飛行之類也、故屬於陽。介鱗者、蟄伏之類也、故屬於陰。日者、陽之主也。是故春夏則群獸除、日至而麋鹿解。月者、陰之宗也。是以月虛而魚腦減、月死而蠃蝮騰。火上華、水下流、故鳥飛而高、魚動而下。物類相動、本標相應、故陽燧見日、則然而為火、方諸見月、則津而為水。虎嘯而穀風至、龍舉而景雲屬。麒麟鬪而日月食、鯨魚死而彗星出、蠶珥絲而商弦絕、賁星墜而勃海決¹⁷⁾。

という「物類相動、本標相應」の説はかなり広く知られていた。そのような思想に基づき、

董仲舒申『春秋』之雩、設土龍以招雨、其意以雲龍相致。『易』曰「雲從龍、風從虎。」以類求之、故設土龍、陰陽從類、雲雨自至¹⁸⁾。

と、雨乞いの儀式に「土龍」が用いられていた¹⁹⁾。その詳細について、

春早求雨、令縣邑以水日、令民禱社家祀、戶無伐名木、無斬山林暴、巫聚蛇八日、于邑東門之外為四通之壇、方八尺、植蒼繪八。其神共工、祭之以生魚、八元酒、具清酒膊脯。擇巫之清潔辯言利辭者以祝、祝齋三日、服蒼衣、先再拜、乃跪陳、陳已、復再拜、乃起、祝曰、昊天生五穀以養人、金五穀病旱、恐不成敬。進清酒膊脯、再拜請雨、雨幸大澍、奉犧牲禱。以甲乙日為大蒼龍一、長八丈、居中央、為小龍七、各長四丈於東、方皆東向、其間相去八尺。小童八人、皆齋三日、服青衣而舞之、(後略)。

夏求雨、(中略)、以丙丁日為大赤龍一、長七丈、(後略)。夏季禱山陵以助之、(中略)、以戊巳日為大黃龍一、長五丈、(後略)。

秋、(中略)、以庚辛日為大白龍一、長九丈、(後略)。

冬、(中略)、以壬癸日為大黑龍一、長六丈、(後略)²⁰⁾。

とあるように、雨乞いの儀式を行い、法陣を作るときには、「龍」が必要だという記述がある。四季それぞれのパターンの儀式に、色違いの龍を用いて、雨乞いの儀式を行うべきだと述べている。その「龍」は雨乞いの儀式の陣の特定な方位に設置され、天と交渉する媒介として使われている。それを先決条件にして、また身だしなみが「清潔」で、交渉することが得意な「巫」に頼んで、天に雨を降らせるよう請願する。つまり、漢代では、龍を用いる雨乞いの儀式はすでに成立しており、そこにおける龍と水との緊密な関連性が普遍的に認識されていることがうかがえる。

17) 『淮南子』「天文訓」

18) 『論衡』卷十六「亂龍篇」

19) 張強、「淺論中國以龍求雨習俗的起源」、『華北水利水電學院學報（社科版）』第25卷第5期、2009年10月、93-96頁

20) 『春秋繁露』卷十六「求雨第七十四」

3. 魔除けとされている龍

水との関係のほか、龍の魔除けという効果も大変重要な要素だと考えられる。その要素は、今より6000年くらい以前の河南省濮陽縣西水坡遺跡から出土された貝の殻で作られた龍と虎に遡ることができる。

1956年湖南零陵漢墓出土の一面博局鏡上面的銘文は：“漢有善銅出丹陽，左龍右虎避不祥，昭爵玄武利陰陽，八字十二孫治中央，法象天地，如日月之光，千秋萬歲長樂未央²¹⁾。

とあるように、この漢代の銅鏡には、「左龍右虎」という並び方に、不祥を僻すという効果があるというような銘文がきざまれている。そのことから、漢代ではそのような認識があったとみられる。

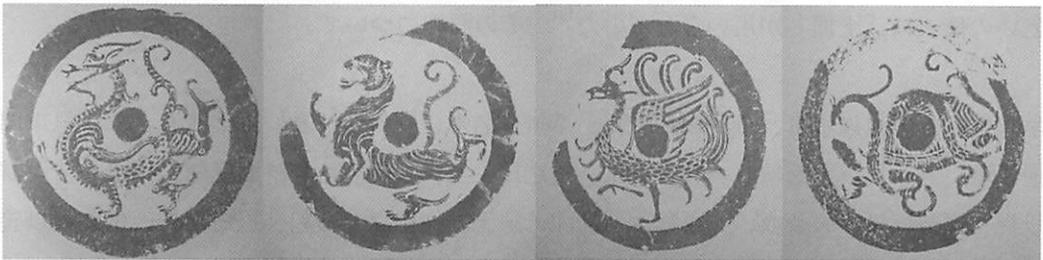


図1 漢四神瓦當²²⁾

そのような認識は漢代の建物からもうかがえる。たとえば、図1が示しているのは「瓦當」という、屋上の周縁に設置され、瓦の落下を防止し、建物を装飾するものである。そこに、四神の一つとして刻まれた龍が見られる。

また、生者だけでなく、これまで発見された後漢時期の墓の中には、龍の姿を描いた画像石が見られる。それらは基本的に墓室の石壁、入口の門柱、地上の祠に、もしくは石棺の四面に刻まれている。(図2参照)



図2 四川省合川市 石墓(後漢) 墓室の門柱²³⁾

こうした銅鏡、建物、墓の門柱、祠などに飾られている龍は、持ち主の魔除け、建物と古墳の守護神として、邪悪を僻し、墓と宮殿の主人を守る効能があると、漢代の人々が認識していると考えられる。

21) 武耕、「漢代博局鏡的圖像象徵意義」、『蘇州教育學院學報』第29卷第2期、2012年4月、73-77頁

22) 赵力光、『中国古代瓦当图典』、文物出版社、1998年

23) 羅二虎、『中国漢代の画像と画像墓』「資料編」、渡辺武訳、慶友社、2002年

4. 天界との交通手段とされている龍

墓室の中に刻まれた龍については、それが人々の死後に現れ、墓の主を乗せて天に上るという伝説があった。戦国時代に始め、「神仙思想」は漢代でもっとも盛んになった。また、仙人と仙界の交通手段を描くときに、龍の引く雲車（図3参照）がしばしば提示される。そのことについては、『漢武帝内伝』、『列仙伝』、『神異経』など、漢代の神仙世界を描く作品からもうかがえる。それは、後世の人々が漢の時代の神仙思想と仙界への想像を引き継いだ証拠だと考えてよい²⁴⁾。



図3 四川省彭州市 漢墓 壁画²⁵⁾

その雲車が仙界の交通道具だという考え方には、前述のとおり、先秦時代にすでに成立していたと思われる『山海経』の影響がかなり大きいと思われる。さらに、『楚辞』「九歌」の中にも、

- 『雲中君』「龍駕兮帝服、聊翱遊兮周章。」
- 『湘君』「駕飛龍兮北徵征、遑吾道兮洞庭。」
- 『大司命』「乘龍兮麟麟、高駝兮冲天。」
- 『東君』「駕龍輶兮乘雷、載雲旗兮委蛇。」
- 『河伯』「乘水車兮荷蓋、駕兩龍兮驂螭。登崑崙兮四望、心飛揚兮浩蕩。」²⁶⁾

とあるように、そこにうたわれた神々は基本的に龍に乗っている。同じく『楚辞』「離騷」には、

- 「為余駕飛龍兮、雜瑤象以為車。」
- 「駕八龍之婉婉兮、載雲旗之委蛇。」²⁷⁾

ということがある。それは、作者の屈原の、自分自身が龍に乗り、天界と人間界を遊覧しているという

24) 張敬彬、「升仙之途與飛升工具——以馬王堆一號墓朱地彩繪棺為例考察靈物圖像的來源與文化」、『榮寶齋』、2013年第8期、56-67頁

25) 羅二虎、『中国漢代の画像と画像墓』「資料編」、渡辺武訳、慶友社、2002年

26) 『楚辞』「九歌」

27) 『楚辞』「離騷」

想像である。ここからも、龍が天界と交通する手段であるという認識がうかがえる。

こうした『山海經』と『楚辭』によって伝承された認識と、漢代では広く使われてきた馬車と結合し、漢代の龍に引かれる雲車が生み出されたと思われる。そうした龍は、一種の人間界と神界との間の交通用の道具・媒介として用いられていると考えられる。

5. 漢代における龍の属性

後漢までの龍に関する議論の集大成とも言える著作は、後漢初期の儒学者である王充の『論衡』だとされる。同書には、龍に関するエピソードが多数引用されているが、特に「龍虚篇」が注目される。長文に及ぶが、以下、その重要な部分を引用する。

盛夏之時、雷電撃折破樹木、發壞室屋、俗謂天取龍。謂龍藏於樹木之中、匿於屋室之間也、雷電撃折樹木、發壞屋室、則龍見於外、龍見、雷取以升天。世無愚智賢不肖、皆謂之然。如考實之、虚妄言也。

夫天之取龍、何意邪。如以龍神為天使、猶賢臣為君使也。反報有時、無為取也。如以龍遁逃不還、非神之行、天亦無用為也。如龍之性當在天、在天上者、固當生子、無為復在地。如龍有升降、降龍生子於地、子長大、天取之、則世名雷電為天怒、取龍之子、無為怒也。

且龍之所居、常在水澤之中、不在木中屋間。(中略)在淵水之中、則魚鱉之類、魚鱉之類、何為上天。天之取龍、何用為哉。

如以天神乘龍而行、神恍惚無形、出入無間、無為乘龍也。如仙人騎龍、天為仙者取龍、則仙人含天精氣、形輕飛騰、若鴻鵠之狀、無為騎龍也。世稱黃帝騎龍升天、此言蓋虚、猶今謂天取龍也。

且世謂龍升天者、必謂神龍。不神、不升天。升天、神之效也。(中略)天有倉龍、白虎、朱鳥、玄武之象也。地亦有龍虎鳥龜之物。四星之精、降生四獸、虎鳥與龜不神、龍何故獨神也。

人為倮蟲之長、龍為鱗蟲之長、俱為物長、謂龍升天、人復升天乎。龍與人同、獨謂能升天者、謂龍神也。世或謂聖人神而先知、猶謂神龍能升天也。因謂聖人先知之明、論龍之才、謂龍升天、故其宜也。(中略)短書言「龍無尺木、無以升天。」又曰「升天」、又言「尺木」、謂龍從木中升天也。彼短書之家、世俗之人也、見雷電發時、龍隨而起、當雷電樹木擊之時、龍適與雷電俱在樹木之側、雷電去、龍隨而上、故謂從樹木之中升天也。

實者、雷龍同類、感氣相致、故『易』曰「雲從龍、風從虎。」又言「虎嘯谷風至、龍興景雲起。」龍與雲相招、虎與風相致、故董仲舒雩祭之法、設土龍以為感也。夫盛夏太陽用事、雲雨干之。太陽、火也。雲雨、水也。火激薄則鳴而為雷。龍聞雷聲則起、起而雲至、雲至而龍乘之。雲雨感龍、龍亦起雲而升天。天極雷高、雲消復降。人見其乘雲、則謂「升天」、見天為雷電、則為「天取龍」。世儒讀『易』文、見『傳』言、皆知龍者、雲之類。拘俗人之議、不能通其說、又見短書為證、故遂謂「天取龍」。

天不取龍、龍不升天。(中略)見龍乘雲、獨謂之神、失龍之實、誣龍之能也。

然則龍之所以為神者、以能屈伸其體、存亡其形。屈伸其體、存亡其形、未足以為神也。（後略）²⁸⁾

ここで、王充は前代の思想と前漢の著作を引用して、龍と自然現象、主に雷と雲との関係と、それを「龍の昇天」と認識した人々の考え、また、そこから生まれた世俗の「天取龍」という解釈などを説明している。くわえて、彼は「龍之所居、常在水澤之中」という龍の水棲のイメージにより、「天取龍」の原因は「神が龍を乗り物としている」という当時の龍のイメージに反撥をした。また、当時における四神の中に龍だけが神にされたという事実をあわせて、龍は「昇天」ではなく、雲に乗って移動しているだけだと言った。最後に王充は、龍が神にされた原因は、体を自在に変化させることにありと提示し、しかし、このようなことができるといっても、神である証拠にはならないと指摘した。こうして、彼は前代の龍の性格を検討し、龍の神格について詳しく論じた。本当の龍は昇天することができず、神ではないと、世にある一般の考え方に反撥している²⁹⁾。

王充が反撥した「世俗」の龍からうかがえるように、当時における龍のイメージは、「水棲する生態」・「自在に変化でき、昇天できる霊獣」・「星宿群である四象の一つ」・「神々の乗り物」・「水の神」・「木の神」・「雷の神」などがあり、固定したイメージはまだ形成されていない状態だと見られるが、一部伝説では龍がすでに神に昇格されたことは確実である。

総じて、漢代の文献史料における龍の属性には、水族の長、雨乞いの媒介、自在に体を変化させる霊獣、四神の一つ（東方の代表）、墓、建物（主に王宮に使われる）の守護神、神々の乗り物、死後昇天の引導者などがある。つまり、漢代において、龍は上古時代の部落のシンボルである想像上の動物の一種から、水族の長、王宮・墓の守護者、神々の乗り物・死者を天界へ導く者、というような要素を吸収しながら、神格を与えられ、神霊にまで昇格されていったと考えられる。管見では、上述したそれらの龍の属性は、中国の古代天文学における「青龍」に統合することができる。

28) 『論衡』卷六「龍虚篇」

29) 黄平、「從《論衡・龍虚篇》解讀中國“龍”的形象」、『重慶三峡學院學報』第27卷（總136期）、2011年第6期、39-43と121頁

6. 古代天文学における青龍

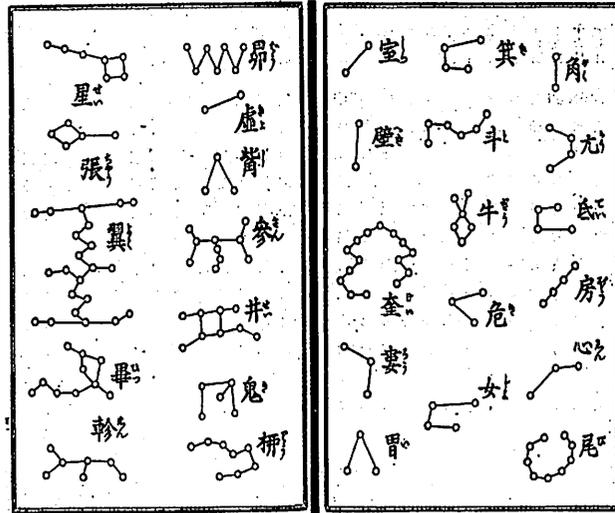


図4 二十八宿図³⁰⁾

原初期の龍はある動物を手本として想像されたものであるが、その後、他の数多くの要素と交流し、融合してきた形跡が見える。現存する史料において、最初に龍と結び付けられたとはっきり把握できるものは星である。つまり、東方の青龍という形の龍である。周知のように、古代中国の天文学では、二十八宿（図4参照）のうち、東方七宿の角宿・亢宿・氐宿・房宿・心宿・尾宿・箕宿をつないで、龍の姿をなぞられている。陰陽五行説によると、東方の色は青なので、この星宿群のことを「青龍」あるいは「蒼龍」と呼び、後には東方の守護神とされた。中国各地で出土した漢画像石にしばしばあらわれる青龍の姿からうかがえるように、そのような天文知識は漢代では普遍的に知られていた。

「四神」の出現は漢代以前に遡ると思われる。『禮記』には、

史載筆士載言、前有水則載青旌、前有塵埃則載鳴鳶、前有車騎則載飛鴻、前有士師則載虎皮、前有摯獸則載貔貅。行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎、招搖在上、急繕其怒、進退有度、左右有局、各司其局³¹⁾。

とあり、それについての鄭玄の注では、

以此四獸為軍陳、象天也。急猶堅也。(中略)又畫招搖星于旌旗上、以起居堅勁、軍之威怒、象天帝也。招搖星在北斗杓端、主指者³²⁾。

30) 【安部晴明篋篋内傳圖解】東京神誠館、1912年

31) 【禮記注疏】卷三「曲禮上」

32) 【禮記注疏】卷三「曲禮上」

とあり、『禮記』にあるその記載は、進軍するときの禮儀であることがわかる。ここにある四神は、東西南北という四方を意味する軍隊の陣列である。中央に「招搖」、つまり北極星の象徴となる旗を立て、戦鬪の指揮者の位置を指示し、同時に天帝の威厳の象徴ともなる。四神は、四方の象徴として使われており、その中にある「蒼龍」は、東方の代表である。

春秋戦国時代になると、幾つかの特定の星宿を表す天文学上の用語であった四神を運命論と結びつけた。鄒衍（約紀元前324年～紀元前250年）は、

鄒衍以儒術幹世主，不用，即以變化始終之論，卒以顯名³³⁾。

とあるように、儒家思想と天文観測を結びつけ、「變化始終之論」である五行説を提出した。さらに、

自齊威宣之時、騶子之徒論著終始五德之運、及秦帝而齊人奏之、故始皇采用之。而宋毋忌、正伯僑、充尚、羨門高最後皆燕人、為方僊道、形解銷化、依於鬼神之事。騶衍以陰陽主運顯於諸侯、而燕齊海上之方士傳其術不能通、然則怪迂阿諛苟合之徒自此興、不可勝數也³⁴⁾。

とし、そこから四神は、天文観測と陰陽五行説の発展とともに、人々の考え方の深層に入っていった。漢代になると、

何謂五星。東方、木也、其帝太皞、其佐句芒、執規而治春、其神為歲星、其獸蒼龍、其音角、其日甲乙。南方、火也、其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏、其神為熒惑、其獸朱鳥、其音徵、其日丙丁。中央、土也、其帝黃帝、其佐後土、執繩而制四方、其神為鎮星、其獸黃龍、其音宮、其日戊己。西方、金也、其帝少昊、其佐蓐收、執矩而治秋、其神為太白、其獸白虎、其音商、其日庚辛。北方、水也、其帝顓頊、其佐玄冥、執權而治冬、其神為辰星、其獸玄武、其音羽、其日壬癸。太陰在四仲、則歲星行三宿、太陰在四鉤、則歲星行二宿、二八十六、三四十二、故十二歲而行二十八宿。日行十二分度之一、歲行三十度十六分度之七、十二歲而周³⁵⁾。

とあるように、天文学における五行説がうまく系統化され、「青龍」と「黄龍」といった東方と中央を代表する「獸」がある。青龍は古来の四神であり、黄龍に関しては、以下の記述がある。

南宮朱鳥、權、衡。……權、軒轅。軒轅、黄龍體。前大星、女主象。旁小星、御者後宮屬³⁶⁾。

33) 『塩鉄論』卷二「論儒第十一」

34) 『史記』卷二十八「封禪書第六」

35) 『淮南子』「天文訓」

36) 『史記』卷二十七「天官書第五」

また、「左龍右虎避不祥」という考えについても、天文学における「青龍」と「白虎」の位置関係から説明できる。漢代の人々の観念では北に座して南に向き、左手に青龍、右手に白虎というのは「正位」、つまり一番の正しい座し方である³⁹⁾。「正」だから「不邪」、つまり不祥ではないと考えられる。言い方を略せばすなわち「左龍右虎避不祥」になる。

中国で、農業活動の時節と前途予測などには、古来天象への観測を重視し、歴朝歴代でもそのための官職を設けられている⁴⁰⁾。漢代もまだ農業が一国を支える時代であり、天気天象と時節への関心は多大であると思われる。そのような時代に整理された龍の属性には、天文学の影響が大きいものだと考えるのも当然であろう。

三、漢代以降の展開

龍に付属された属性には漢代以降になっても、なお拡張と統合する傾向が見られる。その中に、漢末に決りしてきた仏教の影響と歴代王朝の皇室の影響が特に強いとみなされる。仏教の経典と神霊たちの伝来の影響によって、「龍王信仰」が誕生したとされている。また、漢代およびその以降の王朝の統治者たちはみな龍を選び、その権力と統治の象徴にしていた。

1. 「龍王信仰」の成立

前文に述べたとおり、龍と水の関連性もかなり高いものと思われる。先秦時代の文献にはすでに龍の棲みかが「淵」または水辺の洞窟などとされ、それは、漢代になってもそうであり、また、

毛蟲之精者曰鱗、羽蟲之精者曰鳳、介蟲之精者曰龜、鱗蟲之精者曰龍、倮蟲之精者曰聖人⁴¹⁾。

とあるように、龍が「鱗蟲」、つまり鱗がある類あるいは水族の中の「精」、つまり優れたものとされ、それもかなり早い時代の認識であると考えられる。前文に引用した『史記正義』の文章の続きにも、

陰陽交感、激為雷電、和為雨、怒為風、亂為霧、凝為霜、散為露、聚為雲氣、立為虹蜺、離為背璠、分為抱珥。

ということが記されている。龍の力によって雷や雨などの降水と関係する自然現象が引き起こすという認識もあった。そこから、

凡變復之道、所以能相感動者、以物類也。有寒則復之以溫、溫復解之以寒。故以龍致雨、以刑逐暑、

39) 劉道廣、「關於漢“四神星象圖”的方位問題」、『文物』、1990年4月、70-71頁

40) 陳久金、『中國星座神話』、臺灣古籍出版、2005年6月

41) 『大戴禮記』卷五

皆緣五行之氣、用相感勝之⁴²⁾。

また、

或曰「以類相招致也。喜者和溫、和溫賞賜、陽道施予、陽氣溫、故溫氣應之。怒者慍恚、慍恚誅殺、陰道肅殺、陰氣寒、故寒氣應之。虎嘯而谷風至、龍興而景雲起、同氣共類、動相招致、故曰「以形逐影、以龍致雨。」雨應龍而來、影應形而去、天地之性、自然之道也。秋冬斷刑、小獄微原、大辟盛寒、寒隨刑至、相招審矣。」⁴³⁾

とあるように、陰陽五行説などが広く受けいられたことによって、龍と水の関連性が利用され、龍を通じて雨を呼べることになった。

また、周知のように、日本でも、『今昔物語集』に、空海和尚が善女龍王に祈り、雨乞いを行ったという伝説が記されている。「龍王」は仏教の発生したインドでも水神とされている。しかし、インドでは、その中国で「龍王」と翻訳された神霊が、古来ナーガと呼ばれ、その形もインドで多く棲息しているコブラからとったものである⁴⁴⁾。仏教が中国大陸で成立した後、そのインドの土着の神々であるナーガが「龍王」という形で取り込まれたと考えられる。それは、前述の土着の龍と水の関連性についての認識が仏教のナーガの伝説と共鳴した結果だと考えられる。そのことについて、南宋時代の趙彦衛（生没年不詳）は、

『史記』「西門豹傳」説河伯、而『楚辭』亦有河伯詞、則知古祭水神曰河伯。自釋氏書入、中土有龍王之説、而河伯無聞矣⁴⁵⁾。

とあるように述べた。

ナーガが仏教とともに中国に伝わったときに、水との密接な関係という接点で中国本土の龍と共鳴し、「龍王」と翻訳されて受容され、そして、中国から日本にも伝わったと考えられる⁴⁶⁾。明清時代の有名な小説『西遊記』にも書かれたように、中国の東の四つの海にもそれぞれ龍王があるとされた。その伝承の起源も各地にある龍王廟と同じものだと考えられる。現在に至るとそのような龍の属性への認識は基本的に「龍王」という形に集中し、中国、ないし東アジア各地に伝承されてきたと考えられる⁴⁷⁾。中国では、各地に氾濫することのある河川のそばには、「龍王廟」という、その河川に住んで水と水族を治

42) 『論衡』卷五「感虚篇」

43) 『論衡』卷十四「寒温篇」

44) 笹間良彦『図説 龍とドラゴンの世界』「第1章 龍の起源・西洋の龍・インドの龍」、遊子館、2008年、11-34頁

45) 『雲麓漫鈔』卷十

46) 笹間良彦『図説 龍とドラゴンの世界』「第1章 龍の起源・西洋の龍・インドの龍」、遊子館、2008年、11-34頁

47) 張強、「論中國以龍求雨習俗中“龍”由獸向人的轉變」、『華北水利水電學院學報（社科版）』第28卷第6期、2012年12月、25-28頁

めるとされる「龍王」が祭られる祠が設置されている⁴⁸⁾。

2. 王権と結びつけられてきた龍

水の神としての龍は確かに広く知られている。そのほか、もう一つ現在では広く知られてる龍の属性は龍と天子・皇帝との緊密な関係である。龍と王権の関連性は、古代の王権社会で広く展開されていた。その影響は今までも残されている。

在中國古代，帝王往往被視為龍，帝王の子孫被視為是“龍孫龍子”，帝王的後代被稱為“龍種”。似乎龍與皇帝等同，皇帝即龍，龍即皇帝，兩者不可分離，龍成為皇帝的私有物⁴⁹⁾。

とあるように、何星亮氏は、上古時代において、部落トーテムとされていた龍がのちに帝王の個人的象徴になったと述べた。また、何氏は

尤其是明清之後，皇帝吃的、穿的、用的、住的，全都有龍的標記。皇帝的容貌被稱為“龍顏”，皇帝的身體被稱為“龍體”，皇帝的衣服被稱為“龍袍”或“龍袞”，皇帝的坐椅被稱為“龍座”，皇帝的床鋪被稱為“龍床”，皇帝所乘之車被稱為“龍輦”，皇帝所乘之舟被稱為“龍舟”，皇帝的旗幟被稱為“龍旗”，皇帝袞服上的龍紋被稱為“龍鱗”，皇帝即位、登基稱為“龍飛”或“龍潛”，皇帝的儀態稱為“龍行虎步”，皇帝的去世稱為“龍馭賓天”……⁵⁰⁾

と、皇帝のすべてが龍とかかわるようになったと述べた。そのことについて、『国語大辞典』や『広辞苑』など、日本の辞書を調べても、「龍」は天子、または天子に関する事柄につける言葉であり、「龍顔」が天子の顔、「龍駕」が天子の乗り物、「龍旗」が天子の旗など、基本的に上述の何氏が列挙した言葉と同じことが見られる。

現在では、「龍顔」、「龍目」、「龍体」などの言葉が古代で皇帝の体をさしているというようなことは常識のように人々に知られている。

龍が帝王の象徴になる前には、

凡祥瑞、黃龍見、鳳皇集、麒麟臻、神馬出、神鳥翔、神雀集、白虎仁獸獲、寶鼎昇、寶磬神光見、山稱萬歲、甘露降、芝草生、嘉禾茂、玄稷降、醴泉涌、木連理⁵¹⁾。

とあるように、まずは一つの瑞祥として人々に信仰されている。古代の皇帝たちもその信仰心を利用す

48) 吉成名、「龍王廟由來考」、『文史雜誌』、2003年06期、64-65頁

49) 何星亮、「龍：图腾——神」（『民族研究』、1993年第2期、38-46頁）、一 图腾觀念（2）公共图腾—帝王象征、40頁

50) 何星亮、「龍：图腾——神」（『民族研究』、1993年第2期、38-46頁）、40頁

51) 『前漢紀』「序」

るために龍を自身の象徴に選んだと考えられる⁵²⁾。

前文で述べたように、今日の龍の性格には、昇天、龍王、天子の象徴、祥瑞の靈獸などがあり、これらは漢代の龍の性格とは基本的に同じである。そのほか、中国の象徴と中国人の祖先というような属性は、近世社会に入ってから龍に加わられたものである。龍が中国の象徴になった起因は恐らく、清国が外交のために、中国歴史上初めての国旗が作られたことにある。それは「黄底龍紋」のものである。清国は龍を選らんで国の象徴にした。そこから、中国が諸外国の目に龍というイメージで現れ始めた。

そして、清国が減んで近代社会になっても、王権統治の時代で広く展開された龍への信仰は、清国統治の名残と近代の芸術作品などによって、やがて「龍之伝人」などの形で人々に認識されている。その認識に対して、「事實上人物界只有窮凶極惡而詭計多端的蛇，和受人豢養替人幫閒，而終不免被人宰割的雞，那有什麼龍和鳳呢？（中略）萬一非給這個民族選定一個象徵性的生物不可，那就是獅子罷，我說還是那能夠怒吼的獅子罷，如其它不再太貪睡的話。」⁵³⁾ というような反論も数多くある。しかし、現にその認識はまだ広く知られている。

龍の起源について、本論文では論じないが、聞氏と何星亮氏が述べたように、それは上古時代に、ある部落が象徴（圖騰：トーテム）として用いられたことは間違いないであろう。しかし、

……昔者黃帝氏以雲紀，故為雲師而雲名，炎帝氏以火紀，故為火師而火名，共工氏以水紀，故為水師而水名，大皞氏以龍紀，故為龍師而龍名，我高祖少皞，摯之立也，鳳鳥適至，故紀於鳥，為鳥師而鳥名……⁵⁴⁾

とあるように、古代中国において、龍は数多くの部落象徴の中の一つに過ぎない。実際に、河姆渡文明の遺跡からも、鳳鳥の飾りの器物が出土され、殷の都城遺跡からも、太陽の鳥（鳳凰）の形の玉器が発見された。そして、「少皞氏」の部落は、

……鳳鳥氏歷正也，玄鳥氏司分者也，伯趙氏司至者也，青鳥氏司啟者也，丹鳥氏司閉者也，祝鳩氏司徒也，鳴鳩氏司馬也，鷓鳩氏司空也，爽鳩氏司寇也，鵠鳩氏司事也，五鳩，鳩民者也，五雉為五工正，利器用，正度量，夷民者也，九扈為九農正，扈民無淫者也……⁵⁵⁾

というように、鳳凰という大きな範疇の下に、他の小部落にも各自の別種の鳥の象徴があった。それと同じく、大皞の部落にも飛龍、潛龍、居龍、降龍、土龍、水龍、青龍、赤龍、白龍、黒龍と黄龍の十一の氏族があったといわれている⁵⁶⁾。龍は上古時代では、唯一の部落象徴ではなかった。「龍」自身にも、

52) 李均洋、『雷神・龍神思想と信仰——日・中言語文化の比較研究』、明石書店、2001年、第八章 雷神信仰から龍神信仰へ——龍信仰の源を探る、254頁

53) 聞一多、「龍鳳」（『聞一多全集』、上海書店影印版、開明書店、1948年、69-72頁）、72頁

54) 『春秋左氏傳』昭公十七年の条

55) 『春秋左氏傳』昭公十七年の条

56) 何星亮、「龍：圖騰——神」（『民族研究』、1993年第2期、38-46頁）、39頁

様々な種類があった。

ところで、殷・周時代の青銅器に見えるように、龍、或いは龍の類のイメージはよく用いられていた。周時代では、王権と神権が相互に作用し始めた⁵⁷⁾。春秋戦国時代から秦漢時代にかけての時期は、文化の衝突と融合の時期である。何星亮氏は、「龍の崇拜の段階説」を提示し、その中の「龍神崇拜と帝王崇拜の結合の段階」について、「龍崇拜与帝王崇拜相结合的阶段是随着秦汉中央政权的高度集中而形成性的。」⁵⁸⁾、つまりその結合は漢代で行われたと述べた。また、王震中氏も「龍と皇帝権力の結合については、更に秦漢以降の事情に属する」⁵⁹⁾と述べた。龍と王権が結び付けられることについて、現在発見された史料では、少なくとも漢代で盛んに行われていたことは間違いないと考えられる。

また、前文で述べたように、現在では一目瞭然の「龍の性格も図像も、この時代にはすでに定型化していた」⁶⁰⁾のである。つまり、いまわれわれが常識のように理解している龍と王権の緊密な関係は、漢代ですでに発生して、しかも、一定程度にかたまっていた。従って、龍と皇帝にまつわる伝説もますます具体的になり、そのかたまったイメージも国家の統一政策の展開によって広く認識されてきた。何氏は「龍崇拜の段階説」を提示したときに、龍と王権の結びつけられていた状態について言及したが、その具体的な原因や過程などについて、いまだ検討の余地があると考ええる。

さて、春秋・戦国時代は、周王の力が衰え、諸侯が中原を覇権で争っていた。そのときに龍は力強い動物とみなされ、そのイメージで王の力を現すことが史料によく見える。

晉文公出亡、周流天下、舟之僑去虞而從焉、文公反國、擇可爵而爵之、擇可祿而祿之、舟之僑獨不與焉、文公酌諸大夫酒、酒酣、文公曰「二三子盍為寡人賦乎？」舟之僑曰「君子為賦、小人請陳其辭、辭曰：有龍矯矯、頃失其所、一蛇從之、周流天下、龍反其淵、安寧其處、一蛇耆乾、獨不得其所。」⁶¹⁾

とあるように、これは春秋時代の晋の文公重耳（約紀元前697年～紀元前628年）の有名な記事である。その中に記されている当時のある文人が作った文章には、そのまま「龍」を用いて晋文公を表していた。

そのほか、

夫龍之為蟲也、柔可狎而騎也、然其喉下有逆鱗徑尺、若人有嬰之者則必殺人。人主亦有逆鱗、說者能無嬰人主之逆鱗、則幾矣⁶²⁾。

とあるように、「逆鱗」の話である。それは「人主亦有逆鱗」という形で、「人主」を龍に隠喩した。次

57) 李向平、『王权与神权——周代政治与宗教研究』、辽宁教育出版社、1991年

58) 何星亮、「中国龙文化的发展阶段」（『云南社会科学』、1999年第6期、57-64頁）、61頁

59) 王震中、「龍の原型」、西山尚志訳（『大東文化大学漢学会誌刊』47号、2008年3月、1-15頁）、10頁

60) 林巳奈夫、『龍の話 図像から解く謎』中公新書、1993年、1頁参照

61) 『説苑』「復恩」

62) 『韓非子』「説難」

のエピソードもそうであるが、

人有見宋王者、錫車十乘、以其十乘驕稚莊子。莊子曰「河上有家貧恃緯蕭而食者、其子沒於淵、得千金之珠。其父謂其子曰『取石來鍛之。夫千金之珠、必在九重之淵而驪龍領下、子能得珠者、必遭其睡也。使驪龍而寤、子尚奚微之有哉。』今宋國之深、非直九重之淵也。宋王之猛、非直驪龍也。子能得車者、必遭其睡也。使宋王而寤、子為齧粉夫。」⁶³⁾

と「龍珠」の伝説を借りて、「今宋國之深、非直九重之淵也。宋王之猛、非直驪龍也。子能得車者、必遭其睡也。使宋王而寤、子為齧粉夫。」というように、宋国を龍の棲家にたとえ、宋の君主をそこに眠っている「驪龍」とした。

以上の引用文からみえるように、当時の人々が、龍のイメージを用いるのは、王たちの「強い力」を表すためである。

一方、龍のイメージが使われたのは、王たちを描くエピソードだけではなく。孔子と老子の面会を描くエピソードがある。それは『史記』に記されているものである。また、『孔子家語』、『莊子』、『論衡』にも同じような話が見える。そのエピソードには、

孔子適周、將問禮於老子。……孔子去、謂弟子曰「鳥、吾知其能飛。魚、吾知其能游。獸、吾知其能走。走者可以為罔、游者可以為綸、飛者可以為矰。至於龍、吾不能知其乘風雲而上天。吾今日見老子、其猶龍邪。」⁶⁴⁾

とあるように、老子が龍の如くと、孔子が言ったと記されている。龍は、風雲に乗って、天に昇れる。また、『莊子』には、基本的にそれと同じエピソードだが、

孔子見老聃歸、三日不談。弟子問曰「夫子見老聃、亦將何歸哉？」孔子曰「吾乃今於是乎見龍。龍合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽。予口張而不能嚼、予又何規老聃哉。」⁶⁵⁾

とあるように、「合而成體、散而成章、乘乎雲氣而養乎陰陽」と、つまり、龍が自在にその姿を変化し天に自由に飛べると述べた。それらのエピソードは、明らかに老子の智徳を誉めるために、龍のイメージが用いられた。

こうしたように、龍は主に大徳がある聖人を表すことと、権威・力がある王たちを表すこと、というような形で史料に現れていた。その時代において、龍と王権との結びつきはまだそれほど強くはなかったと見られる。

63) 『莊子』「列禦寇」

64) 『史記』卷六十三、「老子傳」

65) 『莊子』外篇「天運」

林氏が述べたように、漢代は、龍のイメージにとって、一つの定型になった重要な時期である。前文にも言及したが、その時代では、特に後漢の時期、

……美事召美類、惡事召惡類、類之相應而起也。……帝王之將同也、其美祥亦先見。其將亡也、妖孽亦先見⁶⁶⁾。

というような、先秦の陰陽五行説と儒家思想を融合した董仲舒の思想が広く受け入れられていた。皇帝の言動と世の中のありとあらゆる現象が連動していると考えられ、明君が徳政を行うと、瑞祥が現れる「天人感応」の思想が広く認識された。それに、

是夏、京師醴泉涌出……又有赤草生於水崖、郡國頻上甘露。群臣奏言「……孝宣帝每有嘉瑞輒以改元、神爵、五鳳、甘露、黃龍、列為年紀、蓋以感致神祇、表彰徳信。……今天下清寧、靈物仍降。陛下情存損挹、推而不居、豈可使祥符顯慶、沒而無聞。宜令太史撰集、四以傳來世。」……⁶⁷⁾

とあるように、龍は古くから瑞祥の一つとみなされているため、自然にその「天人感応」思想に取り込まれた。最後に、

皇瑞比見、其出不空、必有象為、隨徳是應。……東方曰仁。龍、東方之獸也。皇帝聖人、故仁瑞見。仁者、養育之味也、皇帝仁惠愛黎民、故甘露降。龍、潛藏之物也、陽見於外、皇帝聖明、招拔巖穴也。瑞出必由嘉士、祐至必依吉人也。天道自然、厥應偶合。聖主獲瑞、亦出群賢。……⁶⁸⁾

と記されているように、その「天人感応」の思想の影響によって、龍と王権はますます関係を深めてきた。

一方、漢代では、中国の伝説上の人類の祖先である伏羲・女媧が、足が付いていない「半人半蛇」から足が付いている「半人半龍」に変化して描かれる傾向も現れた（図像についての詳細な分析はまた他の文章で行う）。

66) 『春秋繁露』 卷十三「同類相動第五十七」

67) 『後漢書』 卷一下、光武帝紀、中元元年の条

68) 『論衡』 卷十九「驗符篇」

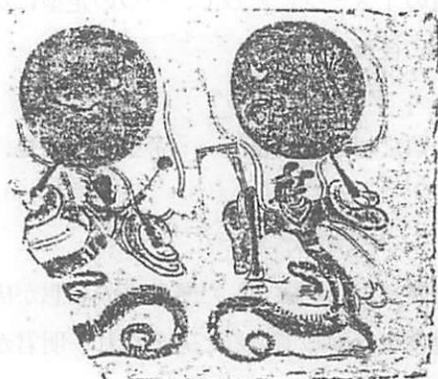


図6 四川漢代画像石 伏羲女媧（拓本）⁶⁹⁾

例えば、図6のように、現在発見された後漢時期の画像石を見れば、足が付いている形で描かれた伏羲・女媧の姿がある。それは、祖先・起源と見られている伏羲・女媧と龍の性格が、漢代の人々の認識では合致していたためと考えられる。また、

傳言黃帝龍顏、顛頊戴午、帝嚳駢齒、堯眉八采、舜目重瞳、禹耳三漏、湯臂再肘、文王四乳、武王望陽、周公背僂、皋陶馬口、孔子反羽。斯十二聖者、皆在帝王之位、或輔主憂世、世所共聞、儒所共說、在經傳者、較著可信⁷⁰⁾。

大電繞樞炤野、感符寶、生黃帝軒轅、代炎帝氏。其相龍顏、其德土行。以雲紀、故為雲師而雲名⁷¹⁾。

とあるように、後漢時代の文献では、上古の聖君である黃帝は龍のような顔をしているとされる。また、漢の高祖の劉邦の出生についても、

高祖、沛豐邑中陽里人也、姓劉氏。母媪嘗息大澤之陂、夢與神遇。是時雷電晦冥、父太公往視、則見交龍於上。已而有娠、遂產高祖。高祖為人、隆準而龍顏、美須髯、左股有七十二黑子⁷²⁾。

という伝説があるように、統治者の権力と龍の神秘性が結びつけられてきた。

さらに、『論衡』では

……因言曰「今年祖龍死。」使者問之、因忽不見、置其璧去。使者奉璧具以言聞。始皇帝默然良久、

69) 羅二虎、『中国漢代の画像と画像墓』「資料編」、渡辺武訳、慶友社、2002年、63頁より

70) 『論衡』卷三「骨相篇」

71) 『潜夫論』卷八「五德志」

72) 『漢書』卷一上「高帝紀第一上」

曰「山鬼不過知一歲事。」乃言曰「『祖龍』者、人之先也。」「祖龍死」、謂始皇也。祖、人之本。龍、人君之象也。人、物類、則其言禍亦放矣⁷³⁾。

と、龍を「人君」すなわち皇帝の象徴であるとし、祖と龍を併用し「祖龍」が「人之先」すなわち祖先であるといった。それは、同書で多数引用されている『春秋繁露』に記されている下記の文章の展開とみなされる。董仲舒は『春秋繁露』に、

『春秋』何貴乎元而言之。元者、始也、言本正也。道、王道也。王者、人之始也。王正則元氣和順、風雨時、景星見、黃龍下。王不正則上變天、賊氣並見⁷⁴⁾。

とあるように、王たるものの行いの「正」と「不正」は、世の中に起こるあらゆる事象に反映すると述べた。その「王者、人之始也」という思想が、『論衡』では「祖龍」という形になったと想定される。同じく『論衡』では、

後與項羽約、先入秦關王之。高祖先至、項羽怨恨。范增曰「吾令人望其氣、氣皆為龍、成五采、此皆天子之氣也。急擊之。」高祖往謝項羽、羽與亞父謀殺高祖、使項莊拔劍起舞。項伯知之、因與項莊俱起、每劍加高祖之上、項伯輒以身覆高祖之身、劍遂不得下、殺勢不得成。會有張良、樊噲之救、卒得免脫、遂王天下。

とあるように、秦代末期の天下の争いで漢の敵対勢力にある智将范增の口を借りて、「吾令人望其氣、氣皆為龍、成五采、此皆天子之氣也。」という、漢の高祖には「龍氣」がみられ、それはすなわち「天子の氣」だ、というような伝説もあらわれた。

皇帝と龍の関係が後漢時代では強く結び付けられている傾向が見出される。やがて、後漢末に、その龍と「人君」の関係が政治舞台に上がり、当時の乱世において王と称する正当性の証拠として使われていくようになった。『三国志』には、漢天子の叔父とされる劉備に関して、

今上無天子、海内惶惶、靡所式仰。羣下前後上書者八百餘人、咸稱述符瑞。圖、讖明徵。間黃龍見武陽赤水、九日乃去。孝經援神契曰「德至淵泉則黃龍見」。龍者、君之象也。易乾九五「飛龍在天」、大王當龍升、登帝位也⁷⁵⁾。

というように、蜀の地を治めている劉備の臣下が武陽の赤水に龍が現れたことを用いて、劉備に、皇帝と称すべきだと進言した。

73) 『論衡』 卷二十二「紀妖篇」

74) 『春秋繁露』 卷四「王道第六」

75) 『三国志』 卷三十二、「蜀書」、先主劉備傳

そうしたように、漢代では、上古時代の祖先・起源という龍の性格が、王権と神権の結合の過程に取り込まれ、龍はそれによって、瑞祥という形からはじまり、やがて皇帝の祖先と化身になって伝承されてきた。また、逆に皇帝と称せる正当性の証拠として用いられたことにもなっていた。それ以降の幾つか時代にも、龍と王室との繋がりが強まったり弱くなったりしていた。元代に初めて龍の爪の数と階級の関連性が一時的に決められた⁷⁶⁾。異民族王朝である元代は、権力の象徴である龍と鳳をタブーとし、

服色等第：仁宗延祐元年冬十有二月、定服色等第、詔曰「比年以來、所在士民、靡麗相尚、尊卑混淆、僭禮費財、朕所不取。貴賤有章、益明國制、儉奢中節、可阜民財。」命中書省定立服色等第于後。一、蒙古人不在禁限、及見當怯薛諸色人等、亦不在禁限、惟不許服龍鳳文。龍謂五爪二角者。一、職官除龍鳳文外……一、器皿、謂茶酒器。除鍛造龍鳳文不得使用外、……一、帳幕、除不得用赭黃龍鳳文外、……一、車輿、除不得用龍鳳文外、……⁷⁷⁾

とあるように、龍は五爪二角と定め、また「比年以來、所在士民、靡麗相尚、尊卑混淆、僭禮費財」という状況を変え、上下尊卑の関係を明白にするために、そのような龍に関する一連の禁令が出された。明朝では、

永樂十五年、其國東王巴都葛叭哈刺、西王麻哈刺叱葛刺麻丁、峒王妻叭都葛巴刺卜 並率其家屬頭目凡三百四十餘人、浮海朝貢、進金鏤表文、獻珍珠、寶石、玳瑁諸物。禮之若滿刺加、尋並封為國王。賜印誥、襲衣、冠帶及鞍馬、儀仗器物、其從者亦賜冠帶有差。居二十七日、三王辭歸。各賜玉帶一、黃金百、白金二千、羅錦文綺二百、帛三百、鈔萬錠、錢二千緡、金繡蟒龍、麒麟衣各一⁷⁸⁾。

とあるように、永樂帝が藩国の王に「金繡蟒龍」という紋様の服を賜ることがあった。「蟒龍」については、

蟒衣為象龍之服、與至尊所御袍相肖、但減一爪耳⁷⁹⁾。

という説明がある。つまり、「蟒龍」は皇帝の服にある龍と似ているが、爪が一本減らしたものである。元以降のどの時代でも、「五爪二角」という特定の龍が王権の象徴として、皇帝に独占されている。こうしたような龍と王権の関連性についての認識は今日までもなお残されている。

76) 宮崎市定、「龍の爪は何本か」、『中国文明論集』岩波書店、1995年、341-345頁

77) 『元史』卷七十八、「志」第二十八、輿服一、儀衛附・冕服・服色等第

78) 『明史』卷三百二十五 列傳第二百十三 外國六 蘇祿

79) 『明』沈德符、『萬曆野獲編補遺』卷二 閣臣賜蟒之始

おわりに

これまでの龍に関する研究には、龍の起源を探るものがかなり大きな割合を占めている。また、龍の属性を論じるのも、その起源説が避けられないテーマになっている。しかし、最初の龍の正体がわかったところで、今の龍とはその繋がりがそれほど強いものだと筆者にはとてもみえない。前文で述べたように、今日における龍の人間に現れる瑞祥や、水を司る神霊や、天神聖者の乗り物など、あらゆる属性が出揃い、そのイメージが人々の頭の中に固まってきた時代は、漢代である。現在中国全土ないし東アジアで広く知られている「龍王信仰」も、龍と王権との関連性も、その発生の起点は基本的に漢代にまで遡ることができる。したがって、むしろ漢代における龍文化を明らかにすることこそ、今われわれが認識している龍の正体と根源を究明することに直接つながっていると考えられる。

漢代では、龍の基本的な属性をすべて有する一つの龍のイメージは天文学より発生する「青龍」である。その東方の天象（いくつかの星宿をつないで、動物或いはものの形になる）である「青龍」の起源はかなり早いものである。「青龍」の心臓に当たる「心宿」の中に一番明るい「心宿二」或いは「大火」（Antares α Scorpio）という星への観測は、古来農耕と深く関わっている⁸⁰⁾。漢代において、「左龍右虎避不祥」や、「龍舉而景雲屬」や、「龍、鱗蟲之長、…春分而登天、秋分而潛淵」や、「龍升天」など、龍が瑞祥であることも、龍と水の関連性も、龍が昇天するイメージ或いは龍と天界との関連性も、基本的に「青龍」という一つのイメージからうかがえる。換言すれば、それらの龍の類のすべての属性を有している大きく統合するようなイメージである「龍」が存在していると考えられる。しかし一方、そのような事実があるにもかかわらず、王充が世俗に普遍的に信じられていた龍の昇天という行動への疑問があるように、また、「青龍」のほかに「黄龍」もあるように、当時の人々には「青龍」も、「應龍」も、「黄龍」も同じく、龍の一種であると信じていたと考えられる。また、龍の属性も人々のそれぞれの考えによってさらに増え、多様化する一方であった。こうしたような龍への認識が混沌している状態は、やがて後に、

俗傳龍生九子、不成龍、各有所好。弘治中、御書小帖、以問內閣、李文正據羅玘劉績之言、具疏以對、今影響記之。一曰蝮鼠、好負重、今碑下跌是也。二曰螭吻、好望、今屋上獸頭是也。三曰蒲牢、好吼、今鐘上紐是也。四曰狻猊、有威力、故立於獄門。五曰饕餮、好飲食、故立於鼎蓋。六曰夔龍、好水、故立於橋柱。七曰睚眦、好殺、故立於刀環。八曰狻猊、好煙火、故立於香爐。九曰椒圖、好閉、故立於門鋪⁸¹⁾。

とあるように、最終的に、「饕餮」や「狻猊」などもともと龍とは一切関係のない動物も、龍の一部の属性が有するため、龍の息子とされた。つまり、伝説は龍が靈獣の頂点に立つという方向に定着していくとみられる。今われわれが認識している龍が定着した経緯について、つまり漢代以降における龍への認識の変遷については、また龍の図像の分析とあわせて、今後の課題にしたい。

80) 陳久金、『中國星座神話』、臺灣古籍出版、2005年6月

81) [明] 楊慎、『升庵外集』、卷九五